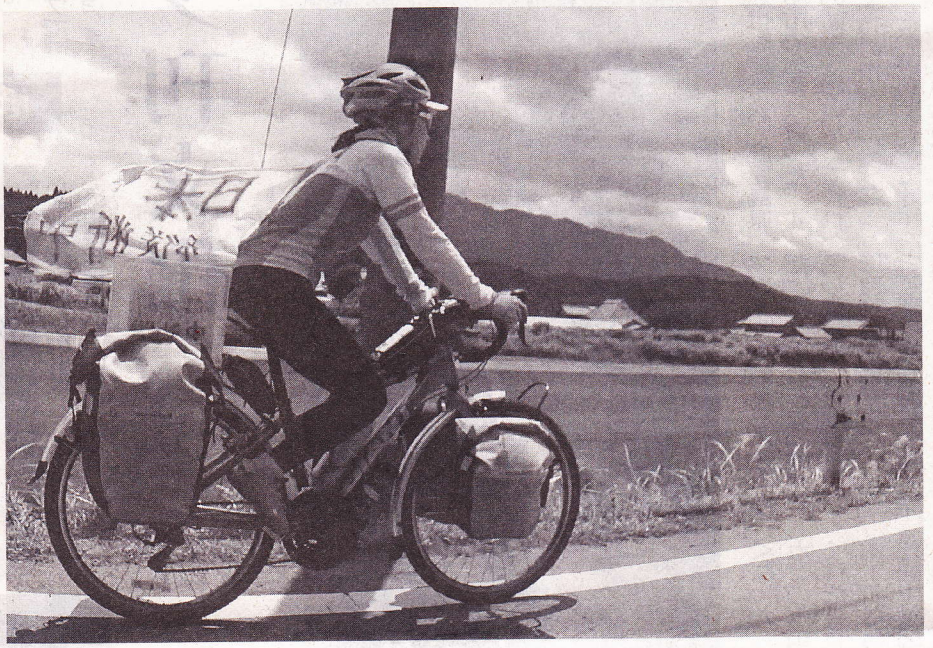
日本経済新聞（夕刊）　2016年（平成28年）8月29日（月曜日）

壁超える勇気 感じて

耳不自由な映画監督、日本縦断作品

生まれつき耳が聞こえず、人とのコミュニケーションが苦手という名古屋市出身の映画監督、今村彩子さん(37)が自転車で日本縦断するドキュメンタリーが来月7日から始まる「あいち国際女性映画祭2016」で公開される。込めた思いは「誰でも、やればできる」。旅の途中、失敗を繰り返しながらも、出会った人々とコミュニケーションが取れるようになっていく姿は、映画を見た人たちを勇気づけそうだ。



沖縄県から北海道まで57日間をかけて縦断した

出会い・成長 ありのまま

タイトルは「Start Line スタートライン」。いろいろなことに悩んだり、夢を諦めてしまったりした人が再出発するきっかけになればと考えた。

旅は昨年夏、沖縄県宜野湾市から北海道宗谷岬までの全57日間。走行距離はおよそ3800キロ。出会った人は300人、総撮影時間は350時間に上った。撮影スタッフとして健常者の男性も自転車で伴走。前を走る今村さんの背中を捉える画面構成が多い。

撮影前は、旅の出会いをしんみり描く「ハートウオーミングな作品」にするつもりだったという今村さん。実際は道に迷ったり、宿の確保を忘れたりと、出会いに至る以前の問題が多発。立ち寄った居酒屋では会話に入れず孤立してしまう。

相次ぐトラブルを巡って伴走者と口論になった際には「聞こえない人の気持ちが分かっていない」と反発した。そのような場面も、「ありのままをさらけ出そう」（今村さん）と、あえて作品に盛り込んだ。

思うような「出会い」がないと悩む今村さんが転機を迎えたのは、同じく耳に障害を持ち、自転車で日本を旅するオーストラリア人男性、ウィルさんとの出会いだ。

ウィルさんは今村さんが「できない」と思っていたことを簡単にやってのけた。車で事故を起こし困っている人に、片言の日本語で声をかけたのだ。今村さんは道中、自転車がパンクして立ち往生している人に話しかけることができなかった。

「耳に障害を持ち、相手の言葉がわかりづらい」という条件は一緒なのに取った行動は正反対。今村さんは「障害を理由に逃げていたんだ」と気付かされた。

旅の終盤、今村さんは

いまむら・あやこ
979年、名古屋市出身。生まれつき耳が聞こえないが、3歳から相手の口の動きで発言を読みとる訓練をし、通常の会話に近い意思疎通ができる。
小学3年のころ字幕付きで見た洋画「E.T.」に心を揺さぶられ、自分がどうしたらいいのかを考えるようになった。

「障害があるから、自分がどうしたらいいのだ！」
「一緒に出かけたい」
「いろいろな人がいる家事が行き届いた遊び場だ！」
「なぜ自分は失敗ばかりするのだ！」
と、自分に問いかけ、自分なりに考えた行動をしてみる。
「障害があるから、自分がどうしたらいいのだ！」
「一緒に出かけたい」
「いろいろな人がいる家事が行き届いた遊び場だ！」
「なぜ自分は失敗ばかりするのだ！」
と、自分に問いかけ、自分なりに考えた行動をしてみる。